

関西学院大学 研究成果報告

2021年 4月 9日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：西山けい子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	ポーとホーソンにおける嘘と秘密と告白の主題について
研究実施場所	自宅および個人研究室
研究期間	2020年 4月 1日 ～ 2021年 3月 31日 (12 ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

ポーやホーソンを中心に、作家における嘘（虚構・フィクション）と真実、秘密、告白、真実の暴露という問題系について研究することを課題とした。成果としては以下のものがある。

- 1) 「"The Masque of the Red Death"とその変奏」（シンポジウム「パンデミックの時代——共同体、統治、終末のヴィジョン」司会・講師：西山けい子、講師：佐野隆弥、福本宰之、高村峰生）、日本英文学会関西支部（第15回大会、zoom開催、2020年12月20日）
パンデミックに見舞われた2020年、英米文学におけるパンデミック表象を通じて、「平時」に隠されている世界の諸相が露わになることについて考察するシンポジウムを企画し、司会・講師を務めた。報告者は、「疫病のナラティヴ——ポー、ホーソン、メルヴィル」（『エドガー・アラン・ポー——極限の体験、リアルとの出会い』2020年、新曜社）をもとにして、疫病文学の特徴として「境界線」の防衛と侵犯を挙げ、ポーの“The Masque of the Red Death”を中心に考察した。ポーの作品が、①疫病文学の代表的作品であるデフォーやハイネやカミュの作品と相互に影響しあうことを確認し、②閉ざされた空間での享楽がアポカリプス的な世界に反転することを示し、③仮面の背後を暴こうとする欲望のありようとその不可能性が描かれていることを論じた。
- 2) 「正直な人間が嘘をつくとき——『八月の光』における嘘と法外な歓待」『フォークナー』第23号（日本フォークナー協会）2021年5月（予定）

フォークナーの *Light in August* はそもそも嘘で始まる物語である。自己保身の嘘について姿をくらませた男を捜して、臨月のおなかを抱えた女が旅をする。相手の男がいると思われるミシシッピ州ジェファソンの町で彼女を助ける正直な独身の中年男パイロン・バンチに注目し、パイロンが見知らぬ人物のためにつくさまざまな嘘の意味を考察した。自分の住まいは放棄し、自分のもっていないものまでを与えようというパイロン・バンチの心づくしの親切は、見知らぬ人への歓待としては破格のものだ。彼の、他者の苦境や痛みにたいして際限なく応答しようとする、特別に倫理的な人間という側面はこれまであまり研究されてこなかった。小さな嘘にも良心の咎めを感じずにいない人物が、他者にたいして、殺人容疑者と犯行時に一緒にいたという、「嘘のアリバイ証言」をしてくれと依頼する——その法外な歓待の精神をデリダの「無条件の歓待の掟」という考え方に照らして考察した。それによって、*Light in August* におけるジョー・クリスマスと元牧師ハイタワーの接点に新たな光を当てることができ、表面上は滑稽な人物にみえるパイロン・バンチの倫理性を明らかにすることができた。

3) 「“The Masque of the Red Death”と反転する世界」『ポー研究』第13号（日本ポー学会）

2021年6月（予定）

1) における口頭発表をもとにして、『ポー研究』第13号の特集「疫病とポー」に寄稿した。「仮面」というテーマは、真実を隠すとともに、「仮面」というかたちでしかこの世に姿をみせることができない世界の真実のありようを表わすものでもある。このテーマはポーとホーソーン（"The Minister's Black Veil" 他）をつなぐテーマのひとつでもあるので、今後さらに追究する予定である。

4) ポーとディケンズの比較研究

共同研究「ディケンズとポー：作品と書評にみる相互照射」（科研費申請中、松本靖彦[代表]、岡本晃幸、西山けい子、橋野朋子、福島祥一郎、渡部智也）に参加した。このプロジェクトは、2019年ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会シンポジウム「ディケンズとポー」（2019年10月5日、於立命館大学）に発する。ポーによるディケンズの *Barnaby Rudge* 評によって知られるディケンズとポーの関係の考察が予想以上に新しい知見をもたらす潜在性と刺激に富む研究であることが確信されたことから、さらに多角的な視点から、両者の比較研究を掘り下げたいという意図のもとに、当初の4名のパネリストに、ポーを専門とする研究者が2名加わった。3年をかけて両作家の比較・影響関係について探究する。2020年度は対面での研究交流は叶わなかったが、各自が原稿執筆にとりかかり、報告者は、両作家における笑いとユーモアの表現についての論考の草稿「ポーとディケンズにおける恐怖とユーモアの接点」を準備した。

5) 嘘、真実、告白に関する理論研究

理論的には、基本文献である Lionel Trilling, *Sincerity and Authenticity* をもとに、誠実、正直、欺瞞などにまつわる自我意識の問題を精査・再考した。また、デリダの『嘘の歴史 序説』で簡略に提示された類型をヒントに、ルソー『告白』やアウグスティヌス『告白』における嘘のモチーフを検討した。さらに、自我の問題とは別個の問題として近年重要視されている「政治の嘘」の問題にも関心を広げた。ハンナ・アーレントの「真理と政治」「政治における嘘——ペンタゴン・ペーパーズに関する諸考察」に触発される論考群や、「ポスト・トゥルース」と呼ばれる現代の状況における「つくられる歴史の真実」の問題の研究において、「嘘と真実」という問題系が新たな展開を遂げている。これらへの理論的考察は、文学にとっても重要な意味をもつ。引き続き、この観点からの研究もつづけていく。

2020年度は、コロナウイルス感染症拡大の影響で、予定していたアメリカでの文献調査を含む、出張を伴う研究・学会活動は実行できなかった。しかしながら、2020年度の後半にはオンラインでの研究発表やシンポジウムが多く開かれ、それらに参加することで、新たな研究の可能性にも気づくことができたのは成果である。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。